

調和的日本文化における親密な他者との関係

—アメリカ文化との比較—

竹村 明子

仁愛大学人間学部

Intimate Relationships with Others in Harmonious Japanese Culture

— Comparison with American Culture —

Akiko TAKEMURA

Faculty of Human Studies, Jin-ai University

これまで親密な他者との関係は、愛着理論や分離—個体化理論など、欧米で提唱された理論を基に検討されてきた。しかし、比較文化研究の立場から、親密な他者との関係の在り様は所属する文化により異なることが示唆されている。実際に、多数の実証研究により、日本における親密な他者との関係が、従来の理論では解釈困難な事例があることが報告されている。そこで本稿では、日本における親密な他者との関係がどのような発達過程を示すのかを明らかにするために、Rothbaum et al. (2000) を参考に、発達段階ごとの親密な他者との関係について、日本とアメリカの違いを調べた。その結果日本では、親子の親密な関係が成人期になっても維持されること、愛着が安定するほど子どもは親と物理的に近接すること、夫婦関係は周りの人々や社会的規範により維持するように促されること、などを見出した。そして、このような日本における親密関係は、調和を重視する文化の影響を受けて発達していることが示唆された。

キーワード：親子関係、夫婦関係、仲間関係、発達、比較文化

緒 言

親子や夫婦など親密な他者との関係は、個人の発達や心理的健康に大きな影響を及ぼす。特に、個人の価値観や自己意識、自己調整との関連が強く、親密関係は個人の発達の方向性の規定要因となる。このような親密な関係は、アメリカを中心とした欧米の文化と、日本を含む東アジアの文化とでは、その在り方が異なると報告されており、文化を考慮した研究の必要性が指摘されている (e.g., Mistry, Contreras, & Dutta, 2013)。しかし、現在の日本の発達心理学研究には、アメリカや欧州の研究結果を基にした研究が多く、日本の親子や夫婦関係の実態を適切に捉えていないのではないかという危惧が生じている。例えば、成人した

子どもが父母と一緒に暮らすことは、日本では健康的な親子関係と捉えられるが、欧米の理論に照らし合わせると自立が妨げられた不適応な状態と判断されてしまう。従って、発達心理学研究を進めるためには、先ず日本の文化が他の文化とどのように異なるのかを調べ、その文化の違いが親子関係や夫婦関係に与える影響について整理した上で、実証的に検討していくことが必要である。

そこで本稿では、第1に最近の比較文化研究について述べた後、第2に親密な他者との関係について日本とアメリカの違いを Rothbaum, Pott, Azuma, Miyake, & Weisz (2000) を基にまとめる。そして最後に、日本における親密な他者との関係について、比較文化研

究の立場から考察を行う。

1. 比較文化研究

比較文化心理学の分野では、欧米と東洋の価値観や行動の違いに関して、以下のような仮説が提唱されている。

①**個人主義 対 集団主義** (Triandis, 1989) 社会の中の価値観の違いに注目した仮説である。個人主義を「個人はそれ自身が目的であり、同調への広範な社会的圧力の重みに抗して、そのようなものとして‘自己’を理解し、自分自身の判断を磨くという信念」または「個人の目標を優先する傾向がある文化」と定義し、集団主義を「集団の目標を優先する文化」や「個人が集団に隷属しているので協調性は高いが、個我が確立していないために個性に乏しい」、「集団の目標を個人の目標より優先すること」と定義している（高野・櫻坂, 1997）。

②**相互独立的自己観 対 相互協調的自己** (Markus & Kitayama, 1991) 自己と他者の在り方において生じる自己意識の違いに注目した仮説である。文化的要因と心的プロセス（性格傾向）の相互作用により文化的自己観 (cultural construal of self) が形成されると考え、自己と他者は独立した存在であると捉える自己観を相互独立的自己観と呼び、自己と他者の間は協調し依存し合う関係にあると捉える自己観を相互協調的自己観と呼んでいる。

③**分析的思考 対 包括的思考** (Nisbett, Peng, Choi, & Norenzayan, 2001) 認知や情報処理の様式の違いに注目した仮説である。重要な対象に注意を向けその本質を見極めようとする思考様式を分析的思考と呼び、重要な対象とその周囲に存在する事象に注意を向けその複雑な関係を明らかにしようとする思考様式を包括的思考と呼んでいる。

④**一次的コントロール 対 二次的コントロール** (Primary vs Secondary Control; Rothbaum, Weisz & Snyder, 1982)：環境と個人の相互作用において生じる自己調整の違いに注目した仮説である。個人が環境（状況）を変えることを一次的コントロール、環境（状況）に合わせ個人が変わることを二次的コントロールが優先の文化と定義している。

まとめるなら、日本の文化が個人に与える影響は、個人の目標より集団の目標を優先し、自己と他者は相互に影響し共存しあう関係という自己イメージを形成し、物事の本質を理解するために自分と周囲の環境との相互作用の中に注意を向け、状況に合わせて自分を変化させていく傾向を促す、ということができる。

これらの視点に加えて Routhbaum et al. (2000) は、発達の方角性の違いに注目し、個体化 対 調和 (Individuation vs Accommodation) という比較をしている。ここでの個体化とは、他者とは独立した自己を形成し、自律的で、自分の考えを主張し、新しい世界へ探索を試みる方向へ発達が促されることを表す。一方、調和とは、他者と協調（または共存）する自己を形成し、他者に対して共感的で、従順で、礼儀正しい方向へ発達が促されることを表す。彼らに従うなら、アメリカでは個性化が重視され、日本では調和が重視される。そして、その違いが親密な他者との関係（例、親子や夫婦の関係）の発達の違いとして現れると述べられている。次節では、Rothbaum et al. (2000) に基づき親密な他者との関係が、文化により異なる発達をする事について見ていきたい。

2. 親密な他者との関係における文化による違い

従来の発達心理学は、親密な他者との関係（例、親子関係、夫婦関係）は以下のように発達すると考えられてきた。すなわち、①親子は依存（共存）関係から互いに独立した関係へと変化する、②親子の愛着関係が安定するほど、子どもは新しい世界への探索を始め、親と子は分離し始める、③青年期の子どもは、親から物理的にも心理的にも離れ、同年代の仲間と親密な関係を形成する、④成人期の親密な他者との関係（夫婦間やパートナー間の関係）は、相互に独立した個人対個人の信頼で維持されている。この考えに対して、Rothbaum et al. (2000) は、文化的違いに考慮した検討が必要であると指摘している。そして、アメリカと日本の研究結果をレビューし、各発達段階において親密な他者関係が文化によりどのように異なるのか考察している。本節では、Rothbaum et al. (2000) を参考に、各発達段階に分け、一般的に受け入れられている理論を解説した後、アメリカと日本の親密関係の違いにつ

いて説明をする。

(1) 乳幼児期

乳幼児期において重要な発達課題の一つは、親子の間に基本的な信頼関係を発達させる事である。愛着理論に従うなら、乳児と養育者の間に信頼関係が形成されるなら、乳幼児は外の世界に目を向け、外界への探索行動を発達させると考えられている。

愛着とは、子どもや大人が特定の人（または動物）との間に築く、愛情の絆 (affectional bond) または親密な情緒的絆 (intimate emotional bond) と定義される。提唱者の Bowlby (1969 黒田他訳 1976) は、発達早期における養育者との関係が、その後の子どもたちのパーソナリティの発達に影響を及ぼすと考え、以下のような愛着理論を提唱した。すなわち、乳幼児と養育者の間に適切な愛着が形成されると、乳幼児は養育者が側にいることで安心や安全を感じ（これを愛着対象者の安全基地役割という）、好奇心の赴くまま新しい世界への探索行動を始める。しかし探索行動の中で、乳幼児が不安や恐怖を感じた時（例、見知らぬ人に出会った時）には、養育者のもとに駆け寄り、助けを求める。その乳幼児の行動に対して、養育者が適切に対応する（例、抱きしめる、怖くないことを教える）ならば、乳幼児は再び安全や安心を確認して、さらに新しい世界へと行動範囲を広げていく。このように愛着理論では、乳幼児が養育者との間で、分離（新しい世界への探索）と再会（不安を感じた時に養育者のもとに駆け寄り安心感を得る）を繰り返すことで、乳幼児は周りの世界に関する安心や、自分の能力に関する自信を得ることができ、養育者から自立できるとされている。Rothbaum et al. (2000) によれば、愛着理論は、親子関係の発達を健康的に独立した関係に発展すると捉えており、個人と他者は独立した存在であるという視点に基づいた理論であると述べられている。

日本でも、乳幼児と養育者の間に愛着は成立し、養育者は乳児に安心を与える存在（安全基地）として機能する。しかし、日本の親子関係の発達は、Bowlby (1969 黒田他訳 1976) が想定したものとは異なり、養育者が安全基地としての役割をはたすなら、乳幼児は（探索行動を発達させるかわりに）より親へ接近するようになる。このような日本の親子関係の特徴に関

して、Rothbaum et al. (2000) は、日本とアメリカの親子関係に見られる、養育者の言葉がけや物理的距離、子どもの注意の方向づけを例に、以下のような説明をしている。

①**親からの言葉がけ** 日本の養育者の言葉がけには、乳幼児と養育者の共存関係を促進する要素が含まれている。例えば、アメリカの母親の言葉がけには、モノの名前や、それは何なのか、どの様に使う事ができるのかなど、情報を含んだ言葉がけが多い。そのような言葉がけは、言葉を使って自分の考えを表現するよう乳幼児を促し、乳幼児の関心をモノや外の世界に向けさせる働きがある。これに対して、日本の母親は、擬態語や擬声語（例、トントン、ヨイショ）を使う事が多く、乳幼児の言葉を繰り返したり（例、そうねマンマね）、赤ちゃん言葉で話しかける傾向が高い。このような言葉がけは、乳幼児の「母親と自分は同じ気持ち」を共有している」という一体感を促し、乳幼児の関心を（外の世界ではなく）親子関係に向ける働きをする。

②**親子間の物理的・心理的距離** 親子のふれ合いに関する研究によれば、日本の母親は乳幼児と一緒にいる物理的時間が長いことが指摘されている。例えば、日本では、親子が一緒に寝る (cosleep) 習慣や、抱っこをする習慣が、子どもが大きくなるまで続く。またベビーシッターに預けずに母親が常に乳児の側にいる傾向が高い。ある調査では、母親以外の育児時間が、アメリカの幼児の場合 23 時間/週であるのに対して、日本の幼児の場合 2 時間/週であることが報告されている (Barratt, Negayama, & Minami, 1993)。しかし、アメリカの親子関係が希薄なわけではなく、アメリカの母親は少し距離を取りながらも常に乳幼児を見守っており、これは物理的距離は離れているものの心理的には近い距離にいることを表している。

③**乳幼児の注意の方向づけ** アメリカの養育者は外の世界へ、日本の養育者は親子関係へ、乳幼児の注意を向けることが報告されている。例えば、アメリカの母親は、乳幼児の視線を周りの世界やモノ、出来事に向ける。例えば、乳幼児に、オモチャの名前や、オモチャのいろいろな使い方を教える。そして、もっと外の世界を探索し、新しい環境と触れあうよう促す。こ

れに対して、日本の母親は、乳幼児の視線を母親と乳幼児の間のやり取りに向ける。そして、乳幼児の他者に対する共感性を育て、人との関係作りのルールを身につけさせようとする（例；日本の母親はオモチャを使って挨拶の仕方や、思いやりの気持ちを教える）。

上述したように、日本の養育者は、常に乳幼児の側にいて、乳幼児との間で一体感を分け合い、乳幼児に安心感や信頼感を与える。そのため、親子間の安定した愛着関係は、乳幼児の自己と養育者の自己の区別を曖昧なものとしてしまい、親子関係はより密着したものとなる。事実、日本の乳幼児は（アメリカの乳幼児と比較して）外界の世界への探索行動が少ないことが、ストレンジ・シチュエーション実験や、ストレスフルな場面、楽しい場面において報告されている（e.g., Bornstein, Azuma, Tamis-LeMonda, & Ogino, 1990）

(2) 児童期

児童期（2-12歳）の普遍的発達課題は、社会や仲間への関わりを広げながら、親子関係を発達させていくことである。

Mahler (Mahler, Pine, & Bergman, 1975 高橋他訳 2001) は、誕生から3歳までの親子関係について、分離-個体化過程という理論を展開している。Mahlerによれば、誕生直後の新生児は養育者と自分の区別がなく、養育者が与えてくれるミルクや抱っここの温かさが、自分に起因するのか養育者に起因するのか曖昧な状態にある。しかし、幼児は次第に養育者と自分は独立した存在である事に気づき始め、歩行ができるようになると、養育者から離れ、近くを動き回ったり探索行動を始める。そして2歳を過ぎると、養育者のイメージ（表象）を思い浮かべながら、養育者の不在に耐え養育者から物理的に離れることができると考えられている。これが個体化の過程であり、独立した個人としての自己が形成される過程である。

Rothbaum et al. (2000) によれば、アメリカの養育者は、子どもに対して、親と子どもは独立した個人であるという意識を促し、自分自身の意思を親に表明することや、自分の欲求と他者の欲求の間でうまくバランスをとることを教える。そして Mahler が分離-個体化過程で述べるように、アメリカの子どもは、自分の意志を明確にするほど、自分の要求と他者の要求の

間に葛藤を感じるようになるが、その葛藤に適切に対処し自分の意志を貫く技術や能力を発達させていく。

一方日本の養育者は、子どもに対して、他者に対する共感性や、義務、他者の期待に応えることなどを教える。そして子どもは、自分の欲求よりも、他者の気持ちや期待に応えることを大切に、それに対する責任を果たす能力を発達させていく。Rothbaum et al. (2000) は、日本の児童と親の関係について、第一反抗期および個人的目標、親によるコントロールの例を取り上げ、その特徴を以下のように示している。

①**第一反抗期** 子どもは2・3歳になると、親に従わない行動や反抗する行動を示すようになる。アメリカの親は、このような子どもの反抗を自律の表れであり、個体化過程の一部と捉え、親子関係が順調に発達している事を示していると捉える (Mahler et al., 1975 高橋他訳 2001)。日本の子どもたちにも、第一反抗期は見られるが、アメリカの子どもに比べると、自分の欲求を主張する傾向や、感情をあらわにする傾向が低い。事実、観察研究や他者評価（例、親や保育士）により、日本の幼児の方が、アメリカの幼児より、自己主張や攻撃行動が少ないことが報告されている (Kobayashi-Winata & Power, 1989)。

②**個人的目標または自己主張** アメリカでは、子どもが自己主張をし、自分の要求を実現するために親と交渉することは、適応的な関係性スキルを育てるために重要な発達と捉えられている。そしてアメリカの親は、"willful child"（要求の多い子ども）を肯定的に評価し、子どもの自尊感情を高めるよう促す。一方、非言語的コミュニケーションや、親子間の共感を重視する日本では、子どもが親の意見に従うことに価値を置き、成熟の表れであると捉える。そして日本の親は、"willful child" をわがままな子どもと否定的に評価し、子どもに自己抑制の能力を育てるよう促す (Markus & Kitayama, 1994)。

③**親によるコントロール** アメリカの親は、子どもの反抗的態度を受け入れる一方で、同時に命令や罰により権威を示し子どもを直接コントロールしようとする。このような親の態度（子どもの反抗に対する寛容な態度と子どもの自由を制限する態度）は、子どもの自律性をより促進し、個体化を推し進めると考えられ

ている (Baumrind, 1989)。一方で日本の親は、子どもを直接しかったり威圧したりすることは少ない。その代わり、子どもが言うことを聞かない時には、子どもの大切なもの(例、楽しみにしていた遊び)を取り上げたり、親が普段と異なる態度を示す(例、返事をしない、無視をする)ことにより、子どもに不安や恥や罪の意識を感じさせ、子どもを心理的にコントロールしようとする。また日本では、子どもに対して思いやりや素直な心を持つことを期待する。素直という態度は、欧米では「自己抑制」のように否定的に捉えられる傾向が高いが、日本では「相手の要求を受容できる程成熟した」ことを表し肯定的に捉えられる傾向が高い (White & Le Vine, 1986)。

上述したように、日本の親子関係では、(独立したのではなく)相互に協調(または共存)する関係が育まれていた。そして子どもたちは、親や周囲の人々の期待を感じ、その期待に応えるように発達していくことが示されている (Rothbaum, et al., 2000)。

(3) 青年期

欧米を中心とした発達心理学では、青年期の発達を、親から物理的・心理的に独立し、新しい仲間関係の形成に時間やエネルギーを費やす時期であると言われる。例えば、第二の誕生 (Second birth) や心理的離乳という言葉がそれに当てはまる。

Blos (1962 野沢 1971) は、Malher の分離-個体化理論を参考に、第二の個体化過程という理論を提唱している。Blos (1962 野沢 1971) に従えば、青年期の若者は、子どもの頃に内在化した親の価値観や存在を否定し、親から自立しようとする。一方で、親から独立することに対する不安も抱えており、親への依存と独立という心理的葛藤を体験する。その不安を解消するために、愛着の対象を親から仲間へと移行していき、仲間との愛着関係の中で自らのアイデンティティを確立していくと考えられている。実証研究においても、アメリカの青年と親の間には意見の衝突が多いこと、青年は「親は自分たちの事をわかってくれない」と感じ、仲間との関係の中に信頼を見出そうとすることが報告されている (White, 1993 広中訳 1993; Trommsdorff, 1992)。さらに親からの期待は、仲間から期待の期待と対立するために、若者は一層親から

独立し、仲間関係に傾倒しやすい。アメリカの文化では、ある程度の親子間の葛藤は、適応的行動であると捉えられており、必須の発達過程であると考えられている。

一方、日本の青年は(愛着対象を親から仲間に移行することなく)、親子関係について児童期における関係を維持しながら、新しい仲間関係も形成していくと考えられている (Rothbaum et al., 2000)。

①親子間の距離 アメリカの若者に比べて、日本の若者は親から心理的・物理的に独立する傾向が低い。例えば、日本の青年は、親の意見に従い親を尊敬する傾向が高く、それを道徳的行為と捉えている。そして日本では、青年が親に反抗することは、心理的に不安定な症状の現れであり、将来の病理(例、ひきこもりや家庭内暴力)を予測すると考えられている (White, 1993 広中訳 1993; Trommsdorff, 1992)。また、日本の若者は、家の中で過ごす時間が、家の外で仲間と過ごす時間より長く、家にいることを心地よいと感じていることが報告されている。その理由として、自分の気持ちを一番良く理解しているのは親であり、親を信頼する傾向が高く、親からの期待にそって行動する事に疑問を感じていないことが挙げられている (White, 1993 広中訳 1993)。そのため、青年期になっても、日本では親子間の愛着関係がそのまま継続される。

②仲間関係 アメリカの青年は、親との間に葛藤を生じ緊張するために、家の中より外にいる時の方が自由を感じる。そのため、愛着対象が親から離れ、仲間や恋人に移行すると考えられている。しかし日本の若者は、親との間で言葉を介さなくても理解し合える関係を形成しているため、家の中にいることに自由を感じ、親子間の愛着関係を維持したまま、仲間や恋人との関係も構築していくと考えられている (e.g., White, 1993 広中訳 1993; Trommsdorff, 1992)。

(4) 成人期

成人期における普遍的発達課題は、パートナーとの関係または夫婦関係(以下まとめて夫婦関係と記す)を形成する事である。アメリカでは、若い新婚の夫婦は、原家族(例えば、実家の親やきょうだい)から独立し、パートナーとの信頼により夫婦関係が維持されると考えられている (Yamagishi & Yamagishi,

1994).

一方日本の場合、実家の親や親せきまたは社会的規範が、夫婦関係の形成と維持に影響を与える。Rothbaum et al. (2000) は、Yamagishi & Yamagishi (1994) に従い、広義の意味での「信頼」を2側面に分け、アメリカの夫婦関係は狭義の意味の信頼 (trust) により維持され、日本の夫婦関係は安心 (または保証 assurance) により維持されると述べた。ここで用いられる狭義の「信頼」(trust) とは、相手の善意や優しさに関する期待であり、パートナーの性格や意図を基に形成される期待である。一方「安心」(assurance) とは、相手に対する親切な行動が自己利益をもたらすという期待のことであり、対人関係に関する知識を基に形成される期待である。この場合の「安心」は、社会的ネットワークによって、関係を維持する事を推奨され、関係を終了しようとする罰を与えられるような保証という働きを表している (Yamagishi & Yamagishi, 1994)。

ところで親密な他者との関係 (例えば夫婦関係) において、信頼 (trust) で形成される関係は、相手に対する尊敬や愛情を基礎としており、個人同士の繋がりである。そのため、信頼を基礎とするアメリカの夫婦関係では、配偶者選択は個人の意思であり、夫婦関係にロマンス (情熱的な愛情) が求められ、夫婦は互いに話し合いで理解し合うことが必要とされる。逆にいうならば、配偶者以外に、尊敬し情熱を感じる人が現れるならば、その人と新しい関係を築く可能性も含まれている。それに対して、安心 (assurance) で形成される関係では、社会的ネットワーク (例えば親戚) により、現在の親密関係 (例、夫婦関係) を維持する方向に圧力がかかる (Yamaguchi, Kuhlman, & Sugimori, 1995)。事実、日本の夫婦はアメリカの夫婦に比べ、離婚率が低い (Kumagai, 1995)。その理由として、夫婦間の関係に対して、周囲の人々がそれを維持するように働きかけることや、特定の対人関係を長く続けることを肯定的に評価する社会の価値感が影響することが、示唆されている。また、Takemura, Okabayashi, & Morling (2019) は、日米の高齢者夫婦を対象に、夫婦喧嘩や夫婦間の楽しい行事の場面において、周囲の人々に支援を求める対処方略と夫婦間

満足の関連について調査を行い、日本では周囲の人々が関わるほど夫婦の well-being が高まるのに対して、アメリカでは周囲の干渉が夫婦の well-being を低下させることを見出している。

夫婦間のコミュニケーションに関して、日本の夫婦とアメリカの夫婦では異なることが指摘されている Rothbaum et al. (2000)。日本では、夫婦の間で話し合いを持つことが少なく、逆に話し合い (言語的コミュニケーション) は夫婦関係が親密ではないことを表すと捉える傾向が高い (Iwao, 1993)。90% 近くの日本人が、夫婦の言い争いの回数は月に1回以下と応えており、夫婦が互いに自己主張することは、相手を傷つけ、親密な関係にひびを入れることになり、親密な関係が終わりに近づいている事のサインと受け取られやすい (Iwao, 1993)。日本の夫婦が、以心伝心を重視し、自己主張をしないことは、夫婦が互いに親密である事を確認する方法の一つである。日本では、配偶者の気持ちを察する事で、一体感を感じ夫婦関係をより強固にする (Weisz, Rothbaum, & Blackburn, 1984)。一方、アメリカでは、直接的な言語的コミュニケーションが夫婦関係には重要と考えられている。直接話合うことは、言い争いの原因となることもあるが、夫婦が互いを理解するために必要な適応的葛藤であり、逆に話し合いを避けることは夫婦関係を壊す (Emery, 1992)。言葉を替えるなら、言い争いが原因で一度仲たがいをしても、互いの気持ちを知り理解し合うことで、再び仲良くなり (reunion)、夫婦関係をより強固なものにできると、捉えられているのである。

3. 日本における親密な他者との関係

本稿は、親密な他者との関係が文化により異なることを明らかにするために、先ず比較文化研究における仮説について述べ、次に Rothbaum et al. (2000) を参考に親密な他者との関係が、アメリカと日本でどのように異なる発達をするのかを見てきた。

アメリカでは、①親子の関係は分離と再会を繰り返すこと、②親への愛着は外界の世界への好奇心を育むこと、③自分の目標と他者の目標との間で葛藤が生じ易いこと、④青年期では親からの分離と親への依存という相反する気持ちを抱くこと、⑤成人期では夫婦間

の親密関係を維持することと新たなパートナーと出会う可能性が増大することが同時に生じること、が見出された。言葉を替えるなら、親密な他者との関係は、各発達段階において矛盾する2つの事柄に対処しながら発達していくとすることができる。Rothbaum et al. (2000) は、このような発達には Generative Tension (生産的葛藤) が影響していると述べている。すなわち、自己と他者の関係を独立した関係であるという自己意識を持つアメリカの文化では、親密な他者との関係は、自己の能力の発達に肯定的影響を及ぼす(例、外界への好奇心を促す) こともあれば、否定的影響も及ぼす(例、親密な他者の要求を優先し自己抑制する) こともある。この矛盾や葛藤に対処しながら変化していくのが、アメリカにおける親密な他者との関係の発達過程と考えられるのである。

一方、日本の親密関係に注目をした場合、①親子間の協調(または共存) 関係は長い間維持され、②親子の愛着関係が安定するほど、子どもと親の関係は近接し、③青年期の子どもは、物理的にも心理的にも親との親密な関係を維持し、④成人期の夫婦関係は、親や親せき、社会的規範により守られていることが示された。Rothbaum et al. (2000) は、このような発達には Symbiotic Harmony (共存的調和) が影響していると述べている。すなわち、自己と他者の関係は協調的関係にあるという自己概念を持つ日本の文化では、親密な他者との関係において、個人は調和を重視し、自分を相手に合わせていくという発達の仕方をすると考えられた。

見てきたように、親密な他者との関係は、文化の影響を受けながら、異なる方向に発達することが見出された。今後、発達研究を進めていくためには、文化的背景も考慮した検討が必要であることが示唆される。

引用文献

Barratt, M., Negayama, K., & Minami, T. (1993). The social environments of early infancy in Japan and the United States. *Early Development and Parenting*, 2, 51-64.

Baumrind, D. (1989). Rearing competent Children. In W. Damon (Ed.), *Child development today and tomorrow* (pp.349-378). San Francisco: Jossey-Bass.

Blos, P. (1962). *On adolescence: A psychoanalytic interpretation*.

Oxford, England: Free Press of Glencoe. (ブロス, P. (著) 野沢栄司 (訳) (1971). 青年期の精神医学 誠信書房)

Bornstein, M. H., Azuma, H., Tamis-LeMonda, C. S., & Ogino, M. (1990). Mother and infant activity and interaction in Japan and in the United States: I. A comparative macroanalysis of naturalistic exchanges. *International Journal of Behavioral Development*, 13(3), 267-287.

Bowlby, J. (1969). *Attachment and loss*. London, England: Hogarth P. (ボウルビィ, J. (著) 黒田実郎・大羽葵・岡田洋子・黒田聖一 (訳) (1976). 母子関係の理論 I 愛着行動 岩崎学術出版社)

Emery, R. E. (1992). Family conflicts and their developmental implications: A conceptual analysis of meanings for the structure of relationships. In C. U. Shantz & W. W. Hartup (Eds.), *Conflict in child and adolescent development* (pp. 270-298). New York: University of California Press

Iwao, S. (1993). *The Japanese woman: Traditional image and changing reality*. Cambridge, MA: Harvard University Press

Kobayashi-Winata, H., & Power, T. G. (1989). Child rearing and compliance: Japanese and American families in Houston. *Journal of Cross-Cultural Psychology*, 20, 333-356.

Kumagai, F. (1995). Families in Japan: Beliefs and realities. *Journal of Comparative and Family Studies*, 18, 135-163.

Mahler, M.S., Pine, F., & Bergman, A. (1975). *The Psychological Birth of the Human Infant*. Basic Books. (マラー, M.S.他 高橋雅士・織田雅美・浜畑紀 (訳) (2001). 乳幼児の心理的誕生—母子共生と個体化 黎明書房)

Markus, H. R., & Kitayama, S. (1991). Culture and the self: Implications for cognition, emotion, and motivation. *Psychological Review*, 98(2), 224-253.

Markus, H. R., & Kitayama, S. (1994). The cultural construction of self and emotion: Implications for social behavior. In S. Kitayama & H. R. Markus (Eds.), *Emotion and culture: Empirical studies of mutual influence* (pp. 89-130). Washington, DC, US: American Psychological Association.

Mistry, J., Contreras, M., & Dutta, R. (2013). Culture and child development. In R. M. Lerner, M. A. Easterbrooks, J. Mistry, & I. B. Weiner (Eds.), *Handbook of psychology: Developmental psychology* (pp. 265-285). Hoboken, NJ, US: John Wiley & Sons Inc.

Nisbett, R. E., Peng, K., Choi, I., & Norenzayan, A. (2001). *Culture and systems of thought: Holistic versus analytic cognition*. *Psychological Review*, 108(2), 291-310.

Rothbaum, F., Pott, M., Azuma, H., Miyake, K., & Weisz, J. (2000). The development of close relationships in Japan

- and the United States: Paths of symbiotic harmony and generative tension. *Child Development*, 71(5), 1121-1142.
- Rothbaum, F., Weisz, J. R., & Snyder, S. S. (1982). Changing the world and changing the self: A two-process model of perceived control. *Journal of Personality and Social Psychology*, 42, 5-37.
- 高野陽太郎・櫻坂英子 (1997). “日本人の集団主義”と“アメリカ人の個人主義”—通説の再検討—. *心理学研究*, 68(4), 312-327.
- Takemura, A., Okabayashi, H., & Morling, B. (2018). How do coping strategies predict feelings about oneself?: Study of older couples in Japan and the U.S. (1 of 3). *3rd Biennial International Convention of Psychological Science*.
- Triandis, H. C. (1989). The self and social behavior in differing cultural contexts. *Psychological Review*, 96(3), 506-520.
- Trommsdorff, G. (1992). Values and social orientations of Japanese youth in intercultural comparison. In S. Formanek & S. Linhart (Eds.), *Japanese biographies: Life histories, life cycles, life stages*. Vienna: Austrian Academy of Science
- Weisz, J. R., Rothbaum, F. M., & Blackburn, T. C. (1984). Standing out and standing in: The psychology of control in America and Japan. *American Psychologist*, 39, 955-969.
- White, M. I. (1993). *The material child: Coming of age in Japan and America*. New York, NY, US: Free Press. (ホワイト, M. (著) 広中平祐 (訳) (1993). マテリアル・チャイルド 同文書院インターナショナル)
- White, M. I., & LeVine, R. A. (1986). What is an Ii Ko (good child)? In H. Stevenson, H. Azuma, & K. Hakuta (Eds.), *Child Development and Education in Japan* (pp. 55-67). New York: W. H. Freeman.
- Yamagishi, T., & Yamagishi, M. (1994). Trust and commitment in the United States and Japan. *Motivation and Emotion*, 18, 129-166
- Yamaguchi, S., Kuhlman, D. M., & Sugimori, S. (1995). Personality correlates of allocentric tendencies in individualist and collectivist cultures. *Journal of Cross-Cultural Psychology*, 26, 658-672.